

「法隆寺を見たい」という事で行った。車を止め歩き出した「あれれ、降ってきた」「車に傘があるから取ってくる、此処で待っていてくれ」と歩き出した、このお寺の中の道は石畳が多い、その硬い石畳を歩きながら「いてて」がきた。今年の夏以降、足の裏が痛い、子どもの頃にもこの痛みを経験したので知っていた。当時親しい近所の医者の方先生が首をひねっていた「おそらく気のもの、他の人は感じないもの」と思っていた、バドミントンを一緒にやっている時「足の裏が痛い、かかとが痛い」とチカちゃんという「フウン、同じか」インターネットで検索した、最近ではわからないことがあるとすぐにこれを利用する、辞書より、解説書より、知ったかぶりの紳士より、的確な答えがすぐに出てくる。先日も“紙垂（しで）”という言葉が知らなかった「しめ縄に垂れた白い紙」とパソコンに入力すると“紙垂”という言葉がたちどころに出てきた、皆様もこの活用は勧めますよ。さて今回「足の裏が痛い」と検索してみると“足底筋膜炎”と答えが出た。腰痛や膝痛と違って悪くも良くもならないようだ、腰痛や膝痛、この二つの持病は温めることで何とか小康状態、歩ける走れる登れる人一倍動けるが、この足底は休んですぐに歩くと「ピリリ」とするがそれ以上には悪くはない、山の下りでかかとを使うと「ピリリ」とする、その程度だから「我慢すれば何とかかなるさ」とすてている。ところが今日は左足底に「いてて」が走った「今日は痛い」「この痛みはきつい、石畳が辛い、アスファルト舗装が辛い」と思いながらも痛さを隠して一日過ごし、帰って靴を脱ぎ、靴下を脱いで足裏を擦った「あれれ、何か刺さってる、血が出ている、なんだ」「抜いてくれ」「ガラスだ」娘が爪を立てて挟んでグネグネ、抜けた、米粒を半分にしたぐらいのガラス片が刺さっていた。「これは痛いわ、こんな大きいのが奥の方まで刺さっていた、抜けてよかった、消毒、焼酎たらしたらいい、絆創膏張ったらいい・・・」というようなことで足底に関しては不快な半日だったが、久しぶりに訪れた法隆寺は非常によかった。

大きな発見「素晴らしいものを見つけた」子供っぽい素直な言い方でいうなら「イイモノミツケ」である。上御堂（かみのみどう）という建物がある、入館料を払って中にすぐ五重塔と金堂、その奥が大講堂そのまだ奥に在る、普段は未公開らしいが今日は見れた。上御堂に入ると大講堂と同様に中心に釈迦三尊、その四方に四天王がいた、同じように居たのだが、上御堂の四天王を見た時に「おっ」と声が出た「いいじゃないか、素晴らしいじゃないか」いつも十二神将が好きで見ている、何か所かのそれを見てきたが新薬師寺の十二神将がすごい、あれはいいと思っている。この上御堂の四天王を見て、新薬師寺の十二神将にも劣らないものすごいものと感激した。十羽ひとからげに十二神将と言っているが、一人一人に名前があり、これは何の神、こちらは何の神と役目も仕事も決まっているのだが、詳しい事は知らない、それぞれの区別も知らない、まさに「十二羽ひとからげに好きなのだ」でご勘弁を。オレと同じように気に入って感心して悦に入る御仁がオレを見て「これは神将ではなく、四天王、四天王の方が位は一つ上」と説明してくれた「四方に在って、顔の色が、赤と黒と青と白の顔の色になっている」「持国天・増長天・広目天・多聞天という・・・」先生の話が止まらないのですと逃げた。室町時代の作らしい、またまたお気に入りの仏に会った、次回いつ会えるかわからないが「気に入った、この赤ら顔はいい」と生意気に言ってゴメンである。

もう一つは有名な百済観音、これは以前にも何度か見ているはずだが、多分昔は他の仏像と同じように薄暗いお堂の中で、寒々と置かれていたので「百済観音か、教科書で見たあれか」程度で何も思わず帰っている。今日は立派な宝物館の立派なガラスケースの中に鎮座していた、「え、こんなに大きいものだったのか」「しかもすごいじゃないの、素晴らしい」と目を見張った。素朴で力強い、淡々と大きい。上御堂の四天王、右手前の赤ら顔氏、精緻できりりと魂に迫ってきた、百済氏は素朴にでんと存在していた、本日の大発見なり。

法隆寺の中に入った頃から本降りの雨、ゆっくり腰かけ、ゆっくり法隆寺を楽しんだ、1500年の時間のちょっぴりでも味わえた。伽藍の周りは土塀でめぐらされている、土の壁が素朴に建つ、大きく立ちはだかる、塀の上には黒い瓦、その向こうの伽藍の上にも黒い瓦、1500年前の最高権力者が造った壮大な建造物、法隆寺はすごい。足の裏にピリピリ感じる痛み、石畳が続く、向こうの山に雲がかかる、空はどす黒い、赤くなった柿が実っている、葉も赤く染まっている、絵に描いたような斑鳩の里だった。

木地山のバス停付近に駐車した。此処はもう4.5回来ている。前回バス停横の集会所で1泊お世話になり益々身近な木地山、見慣れた風景が朝の光でもやっている。運動靴から登山靴に履き替える、車の運転は運動靴がいい「登山靴でも平気」「ハイヒールでも平気」という御仁もおられるが、アクセルやらブレーキやらの角に引っかかりそうで苦手、普通の靴がいい、革靴、運動靴それらがいい。何度か通った木地山までの細い道、川沿いに蛇行しながらどんどん人家が少なくなりその最終地点が木地山だ。この細い道が唯一の道路、此処を通らなければ村へは行けない、反対に村人は此処が寸断されれば陸の孤島になってしまうという大事な道だ。今でこそアスファルト舗装がされているが、その昔はでこぼこ道、そのもっと昔は朽木の方に行く道はなかったのかもしれない、というより昔の資料によると今回登った木地峠が、村人の生活道路だったように書かれている。

リュックサックに弁当とサンドイッチ、雨具にフリースの上着、1リットルの水を入れて10時に歩き始めた。狭い村の中を流れる麻生川に幾本かの支流が流れ込み、麻生川は安曇川と名前を変えて琵琶湖に流れ込む。その一本の支流に沿って歩いて行く、1000M足らずの山だけれど水はどんどん流れてくる、駒ヶ岳という標識があるが其処を曲がらずまっすぐ歩く、標識が無くなり、赤いテープが無くなるが上の方に空が見える「あれが尾根、あそこに取り付こう、あそこまで直登」とどんどん登った。幹を掴み、根を握り、四つん這いになってホイホイ登る、平らな処に出た「空が見える、もう少しで尾根だ、ひと踏ん張りだ」と奮い立たせる、すぐに尾根道に出た。この尾根道は“高島トレイル”という名称で親しまれている、滋賀県と福井県の県境を歩く長い道、芦生の三国岳、マキノ高原の赤坂山、今日の若狭駒ヶ岳、その向こうの百里が岳と既に歩いた山の名前がすらすら出てくる、1000M足らずの山々の連なりだ。今日はこのトレイルを西に向かって歩いている、左側が滋賀県、琵琶湖が見え隠れ、比良も鈴鹿も伊吹も見え隠れ。右側が福井県、日本海が見え隠れ、小浜の市街が見え隠れ。尾根が二股に分かれていても道はすぐわかる、木が違う、滋賀県側は針葉樹が植林されている、福井県側は広葉樹林の自然の木々、その間を歩けば県境、高島トレイルから外れることは無い。今日はズンズン爆発音が聞こえる「雷かな」と以前も思ったがこれは大砲の音と想像する、どんな大砲かはわからないが、雷のような、発破のような腹に響く音がズンズン聞こえてくる、地図を調べると自衛隊の“饗庭演習場”となっている。

12時、駒ヶ岳を過ぎた辺りで昼食。昨日作った弁当、家から持参した弁当だけれど、24時間経っても美味しく戴けた、気温が低いので腐りはしない。木地峠までいくつかの上り下り、2時半に峠着、其処に標識、“木地峠”東西は“駒ヶ岳”と“百里が岳”南北には“木地山”と“上根来(ねごり)”と書かれている。犬小屋のような粗末な祠の中には石の地蔵が傾き、10円玉や1円玉の賽銭がたくさん乗っていた。「ここまでくれば大丈夫、下りは2時間となっている、4時半ごろには着けるだろう、明るいうちに車にたどり着ける」としっかりした標識を見て軽い気持ちで下り始めた。「あれれ、おかしい、この道はけもの道？」と引き返したら、右へ曲がっている道を見つけた「ここにリボンが欲しいねえ」とぼやきつつ30分ぐらいのロスタイム。この峠道は昔の木地村の人にとっての生活道路、男も女も、老いも若きも通った道、小浜の街に繋がっていたようだ。今のように細いが舗装され車の通る道ができるまでは、この峠道が木地村の人の生活道路だった、いつの時代に朽木に抜ける道が繋がったのか、あるにはあったが、小浜の方が近かったのか、そのあたりの事は定かではない、文献が見当たらない。峠から村までの道は荒れていた、崩れていた、途中何度か踏み跡が消えたと思うと、ぼつりと赤いリボンが見える「こっちか」「いやこれはけもの道」ひやひや下を見ながら、後戻りをしながら林道を見つけた、明るいうちにたどり着けた。前回来たときに散歩に来た付近から数件の人家、煙が上がり人が居る。先日会った漫画家の加藤さんが子供の迎えにバス停で待っていたのに再会「この間はお世話様」「芦生には上手く行けましたか」そういえば彼女から芦生へ行く道を聞いたのだと思いだしながらバスが来たので手を振って別れた。汗で服が濡れているが着替えが無いので靴だけ履き替え、登山靴を下の川で洗った。この山の一周はなかなか良かった、楽しめた、いい山行でした。

図版は前日の焚火の様子。葛川河川敷、高島市が管理するキャンプ場、トイレとゴミ集積場が在るだけ、一人300円と安価、車中泊かテントで一泊するにはいい処、鹿が鳴き、トンビやカラスが舞う、滔々と川が流れる、横の小浜街道も夜には車が少なくなる、少し欠けた月が明るかった。

今年のGWに行った<大嶺奥駈道>の画文を作ろうとてんやわんや。間もなく完成予定ですが、文章を見てください。これを基にして、空想の世界で遊ぶ画文も作りたいと思う。お化けの話、朽ちた木の話、山を放浪していた人たち、獣たち、考えるだけで面白そうだが、筆が進むかな。

▼熊野本宮大社と 吉野を結ぶ山道 古代より 修験道の道 道と言ってもほとんど山の中の道 其処を何日もかけて歩く 仙人といわれた 役小角(えんのおずの)が 開いたといわれる 峯の字が正解 峰でも嶺でもない 駈の字が正解 駈ではない この道は ほとんどが奈良県内 和歌山県は ほんの一部 熊野本宮大社あたりだけだった 7日間かけて歩いた 体力が減ってきている 20キロ以上のザックを担いで歩けるだろうか 一日10時間以上の行動ができるだろうか 水が少ないと聞く 出かける前は 不安だった 同道は きぬさん

#### ▼一日目<二蔵宿小屋>7時間行動

背に 60 リッターのバックパック 腹にウエストポーチ 家を出て始発の電車に乗った 茨木駅から 吉野駅に着いた 吉野の街 みやげもの屋 雨が降る 雨具の上下 汗と雨で 服が濡れる 靴に水が入ってくる あんのじょう あとの6日間 靴の臭い 不快感に悩まされた 後醍醐天皇 千本桜 西行 知っている名前が出てくる 千年ぐらい前の 立派な寺社が続く 南北朝時代の南朝の地だ 暗くなりかけた頃に 二蔵宿小屋に着いた 小さい小屋 まさか鍵はかかっていないよね すっと開いた だれもいない ストーブがある 毛布が置いてある あとからひとり またひとり と4人だけだった 彼らとは最後まで 追いつ追われつした

#### ▼二日目<行者還小屋>15時間行動

3時起床 生涯で一番の早起き 夜中に強い 今は上がりかけている 4時過ぎ出発 暗闇の中をライトを点けて道を歩く 5時には明るく 林道にしゃがみ込んで朝飯 駅で買った弁当 五番関から “大嶺奥駈道” “女人結界門” をくぐる “山上ヶ岳” 12時半 “小笹の宿” 「あ、此処は来たことがあるような・・・」幽かに思った 穏やかな大地 雪が相当残っている 川が流れている 重いバックパック 岩場・ガレ場の下りは怖い 「山は女の神様 女が登ると女神様が 女に対して嫉妬する なので女は来てはいけない」 生涯で最高の行動時間 宿に着く2時間3時間前から疲れ切ってよれよれになっていた こんな時に危険な下りが続く 「しっかりしなよ こんなところで足を踏み外したり、転んだりしたら・・・」言い聞かせて歩いた

#### ▼三日目<楊子の宿>10時間行動

「下痢だ おならをすとうんこが出る」「家ならいいが仕事場なら大変 パンツなしで一日中仕事」これには笑った 「オレなら黙っているね よくある事だ 毎日のんでりゃ」ただ今キジウチ きつい登り 弥山を超え 12時に八経ヶ岳(はつきょう) まさか雪がこんなに残っているとは 装備は無い 靴の中が濡れる 荷が肩に食い込む 雪を舐めた 汚く積もった雪の上をストックで削ると真っ白な雪が表れる それを指で掬って口に入れる 旨い トラバースが大崩れ 崖崩れ どんどん侵食している「やばい」

▼四日目<持教の宿>12時間

8時半 釈迦ヶ岳に着いた ここにはでっかい仏像がある 力持ちが担いで上がった ここで キヌちゃん御法楽「ガチャガチャ ソワカ・・・」 10時<深仙の宿>という所に着いた 深い山の中 少し広々 御堂が建っている ここでも キヌちゃん御法楽「ガチャガチャ ソワカ・・・」 陽が当たる、遠くの山々が見える、近くに岩が見える 水を汲みながら「水は 寒いので たくさんいらない、雪もあるし・・・」 この判断が甘かった、此処から先は雪が無く、晴れてポカポカ陽気が戻ってきた 「もう少し水を汲めばよかった」カラカラの喉、惜しみながら水を飲んだ。小屋の管理をボランティアやでやっているとおっしゃる穏やかな好々爺 同年輩か 早速 下の流れまで水汲み ごくごく飲んだ 「この川の水は、もうひとつだ・・・」 食事は相変わらず、ラーメンとライスなり

▼五日目<行仙宿小屋>7時間行動

13時 小屋着 今日には休息日 半日コース 何人かの男 「やあ、お疲れさん、我々今から登山道の補修に行きます、紅茶が入ってます」 「行仙岳の登り道は崩れていたかな?」「早速で悪いが水を汲んで来てくれますか」 大きなタンクを背負い 下った はしごを降りた 「まだか・・・」「遠いな・・・」しめ縄に紙垂(しで) 奥の洞から水が湧いている うつくしい 旨い 小屋の管理 道の整備をしている ボランティアの人たち 「今日は たまたまここに泊まった人たちに ビールと 天ぷらを 振舞います」旨い

▼六日目<玉置神社 6500円也>

3時起床4時出発 ライトを点け暗闇の中 おっとりゆっくり歩く 4時半頃 東の空がぼうっと 山や木が朧げに見えてくる 「ぼ～・・・ぼ～・・・」 野鳩か ひょっとしてフクロウ 野生フクロウでもミミズクでも見たい

“証誠無漏岳(しょうじょうむろう)”1300メートル“笠捨山”1352メートルと低くなり 暖かい 新緑の世界 花満開の世界 街が人家が見え 林道が 乗用車が 「これはつまらないねえ」と独り言を吐きつつ林道横の登山道を歩く ここは奈良県十津川村 3年前の大雨 明治維新前の志士たち その頃の大雨 山の村 木の村 「あ、お神酒が置いてある」 かわらけ(素焼き)ならぬ白い皿 一杯ゴクリ 並々入れて「これでは口で迎えに行かなくては」とゴクリ 「お布施を多めに出したからいただき」とまたゴクリ 五杯六杯と重ねた 本堂で拝礼「最初に鈴・・・」ガンガン思い切って鳴らした、「二礼は軽く、最後は深く・・・」二礼二拍一礼と

▼七日目<最終日>10時間行動

いよいよ最終日 目的地の熊野本宮大社に参り 17時発の最終バスに乗れば 今宵はおのが布団だ 暗闇の中 ライトを点け出発 宿が取れなかった人たちが テントをたたんでいた アップダウンが続く 昨日の飯は上手かった お神酒が腹にしみた 久しぶりの風呂 小さい風呂桶 金玉 フ～ラフラ 神社の弁当 めはりすしが旨い 最後に川を ジャブジャブ 渡りたかったが 今日の水が多い JR 紀伊田辺駅で 酒・ワイン・魚・あてを仕入れて特急列車“くろしお号”の乗客となった 飲んだ 食った 旨い 大阪に着いても一軒 酔った まだまだ 荷は重い 遅くに家に着いた これで大嶺奥駈道は終わった

井山弘幸著<パラドックスの科学論>図書館から借り、難しそうだと思いつつパラパラめくった、面白い、難しい科学の話も載っているが、毛色が変わった話が載っている。本の話の前にパラドックスとは何かと調べてみた。パラドックス Paradox とはオーソドックス Orthodox 正統の逆説「正しそうに見える前提と、妥当に見える推論から、受け入れがたい結論が得られる」事を指す言葉。これは面白い、正統、正道があるのは当然だとわかるが正統、正道ではないが間違っていない「ひょっとしたら正しいかも」正しいという回答が複数以上あることもある「正しいとは言えないまでも間違ってもいない」このグレーゾーンの世界は面白い「迷宮の世界」「大いに遊べる世界」言葉自体は知らなかったが「オレがいつも遊んでいる世界じゃないか」と納得した。最初のパラパラを少し紹介します。

◎親鸞の話「善人なほもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」この悪人正機の教えは、通念に反する典型的な逆説。

◎ニュートンの光学的説明「白光色は純粋なものでなく、混合されたものである」白色は汚れのない純粋な無地の色と誰もが思う。絵具の世界では白色は無垢だが、光はプリズムを通すと虹色に分解する。その虹色を再びプリズムを通して白い光を作ることに、ニュートンは実験で成功した。

◎“韓非子”の中、楚人の逸話に出てくる“矛盾”：武器商人が「堅（かた）きこと、能（よ）く陥（とお）すものなき盾（たて）」「利なること、物において陥（とお）さざることなき矛（ほこ）」と言って盾と矛を売っていた。盾（S）矛（P）不等式で表すと、 $S > P$  と同時に  $P > S$  ということになる。不等式のいずれかが偽り、同時に成り立つことはない。盾・矛の二つの材料、疲労度、使うものの技術と様々な議論が交わされたのは想像がつく。Mという最大の数字、最大の権力者がいたとして、 $M < M+1$  と簡単にけりがつく。最大値ないし最高値という概念は、科学の世界ではパラドックスを生じやすい。

◎“アキレスと亀”これを読んだ時、中・高校背時代を思い出した。友人に数学のできるやつがいた、後々某大学教授になった、今もたまに会う彼が盛んにその話をしていた。「足が速い事で誰もが知るアキレスが、足が遅い事で定評がある亀と競争を行った。当然のことながら、亀は先に走ることを要求した。だがアキレスが亀の出発点に到着するまでの間に亀は進んでいるから、その時点で亀はアキレスのさらに前方にいることになる。その前方に地点までアキレスが行くとまたしても亀は少しだけ先に進んでいる。同じことが繰り返され、とうとうアキレスは亀に追い付く事ができない。」

此処からはオレの絵の話、パラドックスは無いけれど、グレーゾーンに満ちている。過去の絵の写真を整理しながら「はっ」とする写真を見つけ壁に貼りつけた、じっと見た、この絵をもう一度描いてみようと思った。描いているテーマは10年も20年も30年も同じもの、自分では「描き方も技術も感性も変わってはいない」と思っているのだけれど「また変わりましたね、去年とは・・・」と見に来た皆様のフレーズ「ハハハ」と笑いながらわれ関せずの態度でやり過ごしている。30歳前後の若い頃に何人かの熟年、老人画家から「この絵は素晴らしい」と絶賛され「はいこれはまだ描きかけで、これから描き込んでいきます」というようなことを言っていた。その貫禄、その老成に気圧され、大先輩だ、相当の大家と思っていたが、最近になって「あの方が80歳で亡くなられた」「最近まで元気だった」というようなことを聞き、たかだか15、20歳年長だっただけじゃないか、少し兄貴分のだけではないかと懐かしく思う。えらいジイサンだ、立派な人だったと思い込んでいた方々も、悲しく、神経すり減らし、生きておられた、もう一度会いたい。話は飛んだが「素晴らしい」といわれた当時の絵、油絵の具にまみれながらキャンバスと格闘していたまだ途中の絵、あの“描きかけの絵”がいいのだとわかってきたのは相当時間が経ってからだ。「まだ途中でこれからどンドン・・・」がいけない、加筆するほどに勢いが削がれ、臨場感なり最初の感覚が減退していく、そうなんだ、それが重要なんだ、そこなのだ・・・。「思い切って筆を走らせる」「サッサとキャンバスに筆を降ろす」「加筆が無い」「修正、訂正、添削、推敲も無い」「これだ」「これしかない」これがいい。「いやいやもっと」「もっと何とかしなければ」と思うような葛藤もある。オレは武闘をしない、拳も、剣も扱えないがよく聞く言葉に「無心になって、突く、切る、降ろす」「その剣捌きが、魂を得る」「その躊躇が、気持ち鈍にする」「鋭く清冽に」昔の柔術家や侍映画の物真似のようで面映ゆいけれど「オレはこの方法を大事にしよう」と思っている。 図版は、昨夜のアトリエ壁：定点観測。

今回は夕方に出発して山の麓で車中一泊、翌日に百里ヶ岳へ登る予定をしていた。前日、山仲間のトミー女史から訃報のメールが届いた。その前日に「澤山さんからの連絡が取れない、10日ほど前に退院したはずだけど・・・どうなっているのか・・・」と近況がわからない苛立ちのメールが来ていた。次の日にトミー女史に奥さんから「もうだめみたい、後二、三日ぐらい、会いに来てあげて」そして次の日「訃報」の題名が付いたメールがオレの手元にやって来た。「今朝の1時に亡くなったと奥さんからメールが来た」それを聞いて、「早いな」とがっくりきた。苗村の時と同様転移すると癌の進行は早いのかも、通夜の予定を聞かないと出発できないと思っていたら、トミーから「通夜は山から帰る日、思い出して登ってきて」とエール連絡が来た「ならば、帰ってから駆けつけよう」という事で予定通り出発。河原で同道のキヌさんと食事をしながら何時ものように酒を飲みだした。話は俄然澤山さんの話、あの山この山とたくさん山の話が次から次出てきた。

8:00 遠敷峠(おにゅう)から歩き始めた。昨夜は葛川河原でキヌさんと大いに飲んだ。鍋、ビール、日本酒、焼酎まであった、食った、飲んだ、彼は夜中に天に向かってお経をあげていた。食べ始めた頃は満天の星空だったが、しばらくするとポツリと来た、夜中にジャジャ降りもあったが朝は曇りながらも晴れていた。昨日の鍋にうどんをほり込みそれをがつついて、7時に葛川流域から生杉(おいすぎ)遠敷方面へ車を走らせ、おにゅう峠で車を止めた。この峠も二度目、以前来たときには福井県側から地元の人が車で上がってきて、車止めを外してこちら側に来た「通れるの?」「いやあ、命がけ、ひやひや、みんな降りて、運転手一人でそろりと通過した」と強者のおっさんグループ、何かで呼ばれ、とてもぐるりと迂回してられないと、冒険をしたとか、調べてはいないが、迂回となると相当大回り、30分で来られる処、気の遠くなる距離を走らせられそう。滋賀県側から百里ヶ岳は下の「おにゅう谷峠」から登る、もしくは「木地村」から登る<これは廃道に近く危険でやめた>の二つのルートが在るらしいが、今回は福井県側に降りて一周廻るという事で、尾根道のおにゅう峠に車を止めた。この道は滋賀県と福井県を結ぶ舗装道だけれど、福井県側の土砂崩れのため長らく通行止めのようなのだ。本来の山越えはおにゅう谷峠から登ってくる道なんだけれど、我々は“ずる”をして百里ヶ岳に向かっている。今日は我が澤山弘明氏が昨日の午前1時に亡くなった“鎮魂の山行”

10:40 百里ヶ岳を超え、たいしたアップダウンも無い穏やかな尾根道、杉の植林もあるがほとんどは広葉樹林、道には落ち葉が褐色の絨毯の上を歩いている。昨日の雨で地面は濡れている、濡れた根っこを踏んだらスッテンコロリンだ。尾根道はほとんど葉が落ちていますが、少し下は紅葉真っ盛り。先ほども車でここまでやって来る途中の道は黄色いトンネルが続く、朝日に反射してゴールドの世界、車一台がやっと通れる幅の道、その濡れたアスファルトの上の黄色、横を流れる清流の中の岩にへばり付く黄色、透けて見える光の黄色、まことに素晴らしい。百里ヶ岳にはすぐに到着、快晴なら日本海も琵琶湖も見えるかもしれない、木々の葉が落ち周りの景色がすべて見渡せる。見上げると木の相当上に百里ヶ岳と書かれた標識がぶら下がっている「冬用らしい」こんなてっぺんでも3,4メートルの積雪があるらしい。もうすぐ木地峠だろうと歩きながら、やっと見覚えのある標識、粗末な祠、ピンク色の前垂れを付けたお地蔵さんが見えてきた。こんなに立派な標識なのに木地村への道は荒れていた、反対側の上根来は人がよく通っているらしい、途中に「落ちるとやばい」という処もあったが、歩きやすい道だった。平らな処に大きな栃の木、黄色い葉っぱ、褐色になりかかった葉っぱが木の上に残っている「栃の大木、太い、大きい、天狗の団扇だ、この木はいい、今日はこの木に会えてよかった」という一番の木だ。

12:30 根来(ねごり)の村に降りてきた、綺麗なお宮さんがある、舞台がある、廃屋がある、人が住んでいそうな家がある、前回木地村でも見た獣用の檻、もちろん何にも入っていないが熊用だろう。福井県小浜からどん詰まりの村だ。「あ、看板がある、現在地は此処、上までは、え、180分、そんなにかからないんじゃないの」村の中から峠に向かって歩き出す、「此処から鯖街道」と書かれた登山口、林道から外れて登りだす、林道と登山道が交錯して上まで行っているようだが土砂崩れの現場は通らなかつた。人気のない村、何人かが住んでいるような村「此処から小浜の市街地までどれくらいかかるのか」「7時のお通夜に行かなければ、3時過ぎには車に乗りたい、2時間半、行けるんじゃないの」と呟きながらリュックの後ろの鈴とコップをガチャガチャを鳴らしながら歩いた。登山道の途中に、祠と井戸があった「こんなところに井戸」街道を行き来する強者どもの休憩場所だったんだ。楽しい山行でした。

「岡村さん、これで二人目やねえ、山の師匠を見送るの」と言われ、「そうか、二人とも見送ることになった」としみじみ述懐。

最後に会ったのは、半月前、病院へ見舞いに行った。「ご報告」という題のメール「食道癌になってしまった、これから治療に専念する」春に、山仲間にもメールが入った。見舞いに行きたいと思った、見舞いに行ったら嫌がるかなとも思った、なかなか行かなかった。「行ってあげて、悦ぶから・・・」トミーの言葉で、長居にある病院“緩和病棟”へ行った。お互いまずは照れながら、すぐに元の仲間に戻って、笑いあった。「えらいことになったよ・・・」雑談の最中に呟いた。「送るよ、タバコも吸いたいし」車いすを押して外へ。「そこを渡ればいい」と車道に在る横断歩道まで見送ってくれた。嬉しそうに手を振っていた。オレも嬉しそうに手を振った。

オレは、長い間、山に登ってきたが、「疲れて飯が食えない」「体調がおかしい」「吐き気がする」「足がつる」「頭が痛い」というようなことになった事が無い。Mr. Sawayama は若い頃から「体調がおかしい」といつも言っていた。「疲れて飯が食えない」「体調がおかしい」「吐き気がする」「足がつる」「頭が痛い」というような事の常習者だった。「飯が食えない」と食わずにシラフに潜り込んで寝ていた。歩きながら、ゲーゲーあげていた、つらそうだった。「最近よく釣るんだ・・・」ふくらはぎが、太ももがと痛がっていた。「歳をとると、どんどん高山病が低くなっていく」とぼやいていた。「お前は、なんと、頑丈な身体・・・」とは言われなかったが、そう思っていたかも。

最後の山は、一年前の北アルプス。「70歳を超えた、きつい、荷が重い」途中の小屋で2時間ほど昼寝を取ったら元気を取り戻し、3泊のテントを楽しんだ。晚餐で「こんな重いものもってきて・・・」オレに「ぶつぶつ」いいながら、生で重いカレーと御飯を食べていた。「重い分、旨い」「くそお、文句いうな・・・」とはいわなかった、そんな仲だった。これが最後と思っていたら、ほんとに最後の北八ヶ岳（2013年11月）の写真が出てきた

初めて会ったのは、オレが40歳。Mr. Sakaguthi が亡くなって、山に行きたいと思っていた時、友人の旦那がMr. Sawayama だった、5歳とし上だった。友人に連れて行ってくれるよう頼んだ、すぐにFAXで連絡が来た、行程表、荷物が詳細に書かれたメモが来た。「行く」と連絡を入れ、当日、天王寺方面に電車で行き、車に乗せてもらった。最初の山は何処だったか何時だったか忘れた。Mr. Sakaguthi と行った、常念・大天井（おてんしょ）・燕（つばくろ）から2年ぐらい経っていたかもしれない。オレが40歳、Mr. Sawayama が45歳、元気盛りの頃だった。それ以来、ほぼ30年、ほとんどが信州の山だけれど、行った、行った。

「百名山を制覇したい」50歳の頃、まだ10座ほど残っていた。残っているのは名前も聞いたことのない山。そのいくつかも付き合った。

大学山岳部の出身で「何でも知っている、山の事なら、山の事だけ・・・」と若い奴に揶揄されていた。

60L、80Lのリュックを担ぎ歩いた。1時間歩いて休むというのが何時ものキマリで、「きつい」「まだか」と思いつつ前を見るが、止まる気配が無い、モクモク歩く。「ここで、一本とろう」「ここでテントを張ろう」「入口はこっち」「明日は〇時に出発」というような調子だった。

笠が岳、冬の雪の中、「テント、此処でどう・・・」オレが聞いたら「ダメもっと上」しびしびもっと上に張った。翌朝、大雪崩、地の底から響くような底雪崩、オレの推薦場所は崩れていた。

槍ヶ岳、槍平の辺りで真っ白け、右も左もわからない、赤いテープも何処にもない、しばらく考えて「ちょっと待っていて」と上に行き、「こっちだ」と呼んでくれる。こんなホワイトアウトでもわかるんだ。

「あれが〇〇岳」「あそこの膨らんでいるのが〇〇で、こっちが〇〇山」止まって一本とると、タバコを吸いながら説明していた。オレは「ふんふん」とうなずきながら、いつも右から左だった。「こいつは、オレの話の聞かねえ」とは言わなかった、いつも山の話をしてきた。